



北米における発達心理学の展開（Ⅱ）



ウインザー大学 名誉教授

小橋川 慧（こばしがわ あきら）

1963年、アイオワ大学 (Ph.D.)。1964～69年、琉球大学教育学部助教授。以降、ミシガン州立大学で客員教授、ウインザー大学で教授を歴任。専門は発達心理学。著書は *Perspectives on the Development of Memory and Cognition* (分担執筆, Lawrence Erlbaum Associates) など。

「全世界は芝居の舞台¹。そこで演じられるのは羅生門」と、ある心理学者が言うように、最終回となった北米児童心理学物語も私の勝手な視点から語られる。

発達研究心理学科へ

ミシガン州立大心理学科：児童研究所で行われていた北米の児童心理学研究は、1960年代になると「発達心理学」の名称で多くの心理学科に移動を始めた。実験児童心理学者が50年代、当時の米国心理学の主流「学習理論」を吟味したのがこの移動を誘発した。その流れに乗って、ミシガン州立大学 (MSU) 心理学科 (教官数約70人) にも発達心理学博士課程が新設された。「大学院生に『社会的学習』を教えてみないか」という発達系の主任ハリス (L. Harris) の誘いに応じ、68年9月、私は客員教授としてMSUへ出向いた。ハリスとはミネソタ大学 (63～64年) で親交があった。

私が学んだアイオワ児童研究所には大学院の教科しかなかった。それで、授業助手 (TA) として教授を補佐しながら、学士課程の児童心理学の教授法、教科書の比較、評価法、児童心理に興味を起ささせる宿題などを考えることはなかった。MSUでは、教授とTAたちとの授業についての話し合いに参加して、大学院だけでなく学部レベルの教育についても多くを学んだ。

ウインザー大心理学科：ミシガン州デトロイト市のデトロイト川

をはさんで南側にカナダ・オンタリオ州ウインザー市がある。その大学の心理学科も発達の博士課程を作るという。履歴書を送ったところ、面接の招待が来た。「売込みの儀式」(教官と大学院生を相手にした100分の講演) では琉球大学で行ったモデリングの実験を材料にしたところ、楽しい討論会になった。担当教科や待遇など私の希望する条件に適い、69年9月、準教授としてウインザー大30数人の心理学者の仲間になった。発達の博士課程設立を提案した教授たちは臨床児童心理学と臨床神経心理学専攻。彼らと私と同時に採用になったアイオワの後輩と一緒に、私は発達心理学博士課程を作ることになる。

当時、学士課程の発達関係の教科は「児童心理」だけだった。「青年心理」「成人～老年期の心理」が加わり、大学院進学者のため「社会的発達」「認知の発達」「感情の発達」が加わった。現在「発達障害」「発達精神病理学」「発達心理学・実習」など12教科がある。ウインザー大心理学科・学士課程には心理学専攻と発達心理学専攻の2系列ができた。

ウインザー大学での仕事

研究体制：ウインザー大に赴任する前年、アメリカ心理学会 (APA) 発達部門が子どもを対象にした調査に関する倫理規定を発表した。着任早々、私とアイオワの後輩とは地域の教育委員会の代表と繰り返し会合を持ち、APA

の倫理規定も含め、教育現場と大学双方が満足のゆく学校における調査のマニュアルを作った。後輩は、倫理規定や調査企画の書き方の指導、委員会と大学間の連絡を円滑にする調整係を務めた。80年、カナダ連邦政府研究費配分機関に研究費を申請する際には、保護者への「調査の説明・同意文書」、地域の教育委員会の「研究への協力賛同書」、大学倫理委員会の「承認書」などを添付することが必要になる。これらのことは10年以上も実践済みで、研究費申請書作成にも容易に対応できた。小・中校には実験用の特別の部屋はない。大学は小型トレーラー・ハウスを改良した一面視鏡つきの移動式実験車を購入してくれた。

情報検索：仕事のテーマは「学習・情報検索場面」で、子どもはどのような方略を自発的に使うだろうか、また、使う能力を持っているだろうかだった。情報を獲得し保持するリハーサル、体制化、精緻化、といった方略についての研究は他大学で始まっている。一方「情報検索の方略」に関する発達の研究は皆無といってもよい。こうして私の情報検索の仕事は始まった。

研究には、①子どもが意図する情報を得るために、内面の世界 (記憶) や外の世界 (例えば百科事典) を検索する方略 (search process) と、②想起・収集した情報が課題の目的に対して適切

か、十分か、などをモニターして検索の継続・終了を決める過程 (decision process), という二つの下位過程を含む枠組みを使用した。②のプロセスは、進行中の認知過程を「知ること」を意味しており、当時、重要テーマになりつつあった「メタ認知」に関係している。情報検索の枠組みは、学校で子どもらが、検索課題に含まれている情報と既知の知識を統合して検索の手がかりを作る過程や、検索を終える方法など広範囲の研究にも応用した。

新しいテーマを開拓したということで、ケール (R. Kail) とヘーゲン (J. Hagen) 編集の Perspectives on the development of memory and cognition の「検索の方略の発達」を担当した。ヘーゲンは私の所属する学会の事務局長で、彼と知り合ったことは幸運だった。

自己制御的学習：80年代に新しい仕事を加えた。大学院生ドゥフレン (A. Dufresne) と全ての自己制御学習場面で学習者がなすべき決断を考えた。有能な学習者は、①何を重点的に学習すべきかを決めて (what to study) 時間を差配分し、②目的達成のためにどれだけ学習を継続すべきかを決める (how long to study)。私たちは、学習時間の配分を規定する要因として、学習目標・学習状況と学習者の特性 (メタ認知的知識、モニタリング、モチベーション・効力感) を分析した。なお、私たちのモデルの①と②の部分は、それぞれ、コロンビア大学のメットカーフ (J. Metcalfe) が2005年に発表した「学習時間配分のモデル」の「選択」(choice) と「持続」(perseverance) の部分に匹敵する。また、「時間の配分」が重要なのは学習場面だけではない。小学校高学年になると、自発的

に学習材料の難易度や重要な箇所をモニターし、その情報を利用して学習時間の配分を調節したり、学習の目的に合わせて方略を変えたりするのが観察される。学習の進行具合を正確に判断して学習時間を十分に調節するのは高学年児、時には大学生にも困難なようである。

ここで話題にしている調査の焦点は、被験者が「どう学習の過程をコントロールするか」にある。70年代の初期、この種の研究には予想外の批判があった。通常の学習の実験では材料の提示時間、提示順序、学習の方法等は実験者に統制されている。被験者ペースの学習調査は「統制の取れない資料の集積」という印象を与えたい。発達の研究では子どもらの自発性と同時に、彼らの能力・知識の「限界」も知りたい。そのため、観察、質問、示唆、教示、いろいろな手法を用いた。

「心理相談室に来る多くの学生の問題の原因は、大学での学習の方略に不案内なためだ」と臨床心理学の院生が解説し、意外、臨床系と私に接点が誕生。特定の教科の学習活動とそれを規定する諸要因を吟味した臨床系院生の大掛かりな調査に関係した。

応用

基礎研究から教育への応用：68年のAPA、中西部、東部各心理学会大会での会長講演の趣旨は「心理学の知識を社会に提供しよう」だった。会長らの提言に賛同し、80年代になると、対連合学習や系列学習などの「基礎実験」の材料を用いた私たちの研究の成果、特に認知方略や認知過程をモニターするスキルを広範囲の教育の場に提供しよう、という動きが起きた。その中心人物で、“Good Strategy User Model”を発表したプレスリー (M. Pressley) との交流は

有意義で多くを学んだ。イリノイ大学でパリンサー (A. Palincsar) とブラウン (A. Brown) は、読解力の未熟な生徒らに文章理解のプロセスをモニターするメタ認知的方略の教授を試み見事な成果を挙げた。

応用発達心理学：60年代の発達心理学の大学院教育は実験室中心で、将来研究費を獲得し論文を発表する人材養成を目的としていた。私の仲間は全員大学に就職した。80年代になると大学以外の職場開拓の必要性や発達の知識を生かして実際問題に介入したいという学生の要望もあり、応用発達心理学博士課程が心理学科にできた。学会では「応用」を望む学生側の要望を聴く談話会があり、それに対応する形で「新教科課程」を発表する大学もあった。応用重視のウインザー大心理学科は、私の退職後、発達系の博士課程は臨床児童心理学 (教官7人) と生涯発達心理学を提唱する臨床神経心理学 (教官6人) に発展した。応用は臨床以外に学校・家庭相談、社会政策と多種、それに州やAPAの認定基準を考慮するので履修課程設定は単純ではない。

児童発達研究協会 (SRCD)

その背景：「トウモロコシの栽培に研究が必要なら育児の改善にも研究が必要」とのヒルズ夫人の働きで、1917年、アイオワ児童福祉研究所が誕生した。続いて、コロンビア、ミネソタ、カリフォルニア、トロント大学に児童福祉研究所が設立。こうした運動を背景に Society for Research in Child Development (SRCD) は、学際的発達の研究の実施と研究成果の応用を目的に掲げ1932年に発足した。

SRCDとの関わり：私が最初に参加したのは、75年にデンバーで開催された大会。カナダ側からはウエスタン・オンタリオとウイ

ンザー大、アメリカ側からはミシガン、ミシガン州立、ウエーンステート、オークランドの諸大学の発達関係の教官や大学院生がデトロイト空港に集合、大挙してデンバーに押しかけた。「記憶と認知の発達」の1章を執筆中の私は、フレイブル (J. Flavell) をはじめ他の執筆者たちと意見の交換をしたり、学会のジャーナル *Child Development* (CD) の編集委員のパーティーに出席したり、収穫の多い大会だった。以後、体調を崩してトロント大学附属病院の世話になる99年まで、SRCDの大会には皆出席だった。

大会での発表希望者は「研究要約」を審査班の一つに提出する。83年のSRCD設立50周年記念大会では、20の審査班の一つ「認知過程：注意、学習、記憶」班の審査委員長を務めた。認知班に投稿された200あまりの「要約」を、18人の熟練査読員に5段階で評価してもらった。ちなみに、口頭発表のみだった81年大会の要約の受理率は30%。83年の大会では初めてポスターセッションも加わったせいだ、私が担当した認知班の受理率は50%だった。ポスターセッションを大幅に使用する最近の大会の受理率は80%と聞いている。私の学会への一番の奉仕は、75年以後15年間CDの編集委員を務めたことだろう。

大会は大きくなった。57年のアイオワ大学での大会参加者は200人程度で全員大学の寄宿舎に宿泊したという。最近の大会の参加者は6500人、査読班の数も32になっている。

SRCDの変化：大会の規模以外に、少なくとも三つの変化があった。第一に学際・応用面。学会創立当時の合言葉は学際的児童の研究だったが、私が学生だった60

年代は心理学者の学会という感じだった。それが70年代に入って、心理学者と非心理学者が交代で会長になっている。79年大会の、「発達心理学の学際面と応用」というシンポジウムで、学会の原点に戻る動きが本格化した。原点への回帰は単なる回帰ではない。87年以降の学会の出版物 *Social Policy Report* からも明らかだが、「科学的資料を基礎にした応用・実践」という強い成長を感じる。

第二に生涯発達の視野。33年、第1回大会で、「児童発達の研究は、『受胎から成熟まで』をカバーすると一般に考えられている。しかし、老齢期まで我々の眼を向けよう」とウッドワース (R. Woodworth) 会長は参加者に訴えた。20年代に始まった縦断的発達研究の被験者が高齢期に入ったこと、老人学の発展などがきっかけになり、70年頃から、SRCDの会員はウッドワース会長の望んだ「生涯発達心理学」に関心を示すようになる。99年版の会員名簿では、20%の会員が「関心を持っている年齢範囲はlife span」と答えている。

第三に国際化。90年代になると、SRCDの大会に北米以外から参加する研究者が多くなった。稲垣佳世子、高橋恵子、波多野諄余夫諸氏の大会での活躍は高い評価を受けていた。現在会員は50以上の国を代表している。最近の大会では、研究要約の査読審査者は北米以外からも参加している。子どもらは、多種多様な環境で成長しているが、特に認知の発達の研究は個人差や文化差より普遍性追求の傾向が強かった。その意味からも、学会の国際化の方向は望ましい変化といえよう。なお、発達心理学の発展には学術誌 *Developmental Psychology* を出版するAPAの貢献

ももちろん大きい。

むすび

年齢基準の行動の記述に専念していた北米の児童心理学は、1950年代に理論面で成長し、多くの心理学科に発達心理学として発展した。「生得的能力は」「何が発達するか」「発達のメカニズムは」といった発達心理学の重要な基本的問いにも対応してきた。生涯の発達心理に注目することで新しい発達観も出るだろう。

最近のSRCD大会の研究発表審査班の数が32もあるということは、心理学のほぼ全ての論題について発達の研究が行われていることを示唆する。それは同時に発達心理学のますますの細分化も示唆する。46年に出版されたカーマイケルの児童心理学ハンドブック (63号 p.44 参照) 1巻は、私が退職した98年の第5版では4巻に膨れ上がった。激増した発達心理学の理論、方法、トピックス、実験・調査資料から、大学院教育の目的に「何を必読に選択し」「選択したものにどれだけの時間を配分するか」を決断しなくてはならないかつての同僚には同情する。

末筆ながら、本懐旧談を書く機会をくださった日本心理学会に感謝の微意を表したい。本欄に私が登場した背景には、共に北米生活50余年になる西里静彦トロント大学名誉教授 (本誌57~60号「心理学ライフ海外編」参照) との、10年来続いた月例昼食会での多岐にわたる歓談があったことを付記しておく。

1 最初の台詞は「お気に召すまま」第2幕第7場から。この後、シェークスピアの「生涯7段階説」が続く。